The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	交差するソウルと東京 : 1920・30年代における横光利一と朴泰遠の比較
Author(s)	姜, 素英
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57848
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【20】

氏　　名	姜（かん）　素（そ）　英（よん）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３４７４　号
学 位 授 与 年 月 日	平成22年３月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	交差するソウルと東京－1920・30年代における横光利一と朴泰遠の比較－
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 准教授　橋本　順光　　教　授　北村　　卓

論 文 内 容 の 要 旨

序では、これまでの先行論文が見逃していた、横光の韓国体験と朴泰遠の東京留学を対比させながら、横光と朴泰遠における交差するソウルと東京の表象を分析する方法を述べ、かつ、影響関係のある横光の「機械」と朴泰遠の「距離」を、両者が交わる時代的接点と共に、文体及び内容の側面から比較することを述べる。こうした作業を通して、日本と韓国の比較文学研究において、境界を越える国際的・東アジア的な視角の獲得もできることを目指すとした。

第１章では、横光における韓国について、鉄道技術者として韓国へ渡った父・梅次郎の

ソウルでの客死を素材として書かれた「青い石を拾ってから」と韓国に関するエッセイを通じて考察した。かつ、『上海』における中国認識との比較考察も行った。

第 2 章では、横光の 1930 年の作品である「機械」と朴泰遠の 1936 年作の「距離」における文体と内容を比較考察した。作品分析の前に 1930 年と 1936 年という時期に、日本人と韓国人として両作家がそれぞれ相手の国に渡っているという交わる部分を踏まえた検討を行った。

第 3 章では、朴泰遠における東京留学の意味を、彼の渡日背景の実態と心構えを押さえると共に、留学生活の実体験を描いた「半年間」と、渡日前の作品、エッセイ等を参照することを通して考察した。当時の韓国の学生がなぜ東京に向かったのかという疑問から出発し、朴泰遠は 1930 年の東京で何を見ており、何を感じ、それが彼にどのような変化をもたらしたかを考察した。

第 4 章では、日本から帰国した朴泰遠の 1934 年と 1936 年の作品である「小説家仇甫氏の一日」と『川辺の風景』を通じて、彼の韓国的文学の具現について考察した。そうした韓国的文学に辿りつく前に、朴泰遠の文学世界を形成した要素の一つである日本文学の重要な作家として、三石勝五郎、夏目漱石、芥川龍之介を挙げ、特に、三石勝五郎への強い関心に注目した。

全体を通して、このように時空間的に隣接していた両作家が、それぞれ東京とソウルという互いにとっての他国の都市での体験によって、さらに自分の国というものを強く意識し、横光は日本人として、朴泰遠は韓国人として、近代両国の歴史の流れに沿って固有の文学の道を歩んだことを論じることから、韓国と日本の歴史的文脈からも両者の差が生じているとする。

論文審査の結果の要旨

第 1 章では、従来考察の対象として集中していた横光の中国体験に先立っての朝鮮体験の後を追い、それまでの作家たちの朝鮮体験との比較を行うなど新しい視野を開くことに努めている。中国体験に比して、横光の朝鮮体験が類型的なものにとどまっているという指摘は見逃すことのできない、重要な論点である。

第 2 章も見過ごすことのできない二つの作品を、影響関係にあるとした上で比較し、文体の問題にも踏み込んで従来指摘されることのなかった論点を明らかにしたことは、高く評価するに値するものである。

第 3 章における朴泰遠における東京留学の実際の解明の試みも極めて重要な成果をもたらし得る試みである。指摘した個所などはその後の朴泰遠を考察するうえで避けて通れないものを提示したものといえる。

第 4 章の指摘も今後見過ごすことのできない問題提起となっており、さらなる探究の可能性を示している。

全体として、「交差するソウルと東京」という試みは極めて魅力的なものであり、新鮮な地平を切り開く可能性へとつながるものである。

しかし、同時にその大きな試みゆえに、いくつかの未達成や考察の不十分な点に目をつぶることもできない。たとえば、第 2 章は他とは異質な論点をはらむものであり、論文全体における配置に問題があり、比較文学の試みとしては幾つかの弱点を抱えており、真摯に考え直す必要がある。全体の論述において、小説をフィクションととらえず、そのまま事実の問題と処理する傾きも首肯できない。掘り下げが浅く、通り一遍の分析に終わっているところもある。〈比較文学〉という方法の貫徹にどこまで自覚的であるかということや、少なからぬ個所での表現上の不備も指摘せざるをえない。

このように、弱点も疑いなく残しているが、今後の発展の可能性を十分に示していると思われる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。